書きあげられ、地下財宝を担保として発行する、とされた紙幣に署名する。翌朝「遊園」の場でそれが明らかになる。それは「詐欺」だと皇帝は激怒する。しかしすでに増刷された紙幣は通用し、宰相以下満悦である。ここでファウストの機能が発揮される。「ありあまるほどの宝が、お国の地の底ふかくに、／じっと待っていて、利用されずにいるのです。……けれども深く洞察する力を備えた人間は／無限なる富に対して、無限の信頼を託します。」メフィストの仮象としての地下財宝、皇帝の妄想裡に署名された仮象としての紙幣が「信頼」によって実在に転換する。現実に行われている貨幣（紙幣）経済が信用経済に基くポイントを突いている。従来のネガティーフな解釈がポズィティーフに変ってきた解釈として興味深い。

親鸞の臨終観

大門照忍

仏教では、種々の観点から臨終の意味が問われてきた。浄土教では臨終正念、来迎引接を期する思想があるが、これに対して宗祖親鸞は、臨終を期することなく平生業成の宗義を示し、「真実信心の行人は、摂取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す、このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし……信心さだまるとき往生またさだまるなり、来迎の儀則をまたず」（末灯鈔）と明言している。臨終を問題とするのは、来迎をたのむ諸行往生の人と、逆悪の凡夫で臨終に善知識に遇い開悟される人と、まだ信心の定まらぬ人とにかぎるとのべている（末灯鈔）。

宗祖は、「横超断」の釈で、信の一念に「六趣四生因亡果滅、故即頓断二絶三有生死一故曰レ断也、四流者則四暴流、又生老病死也」（信巻）とのべ、それゆえに「信心のひとはその心つねに浄土に居す」（末灯鈔）という新らしい生の意義を明らかにしている。「信受本願前念命終、即得往生後念即生」（愚禿鈔）の意味も、廻心の阿闍世王をして「我今未レ死已得二天身一、捨二於短命一而得二長命一、捨二無常身一而得二常身一」（大般涅槃経―信巻）と語らせる所以も、これに他ならない。もはや臨終観の介入する余地などないといえよう。

しかし、宗祖は決して臨終について無関心、あるいは軽視の態度をとっていたのではない。それは、元祖の入寂時の奇瑞の讃仰（化巻・高僧和讃）、また「愚癡無智のひとも、をはりもめでた

く候へ」（末灯鈔）との断言、さらに「恒願一切臨終時、勝縁勝境悉現前」について臨終の真の意義を明らかにし（往生礼讃―一念多念文意）、金剛心の行人が臨終に魔事の障りをうけない利益をあげること（行巻）などに窺えよう。まず善導の「古人云言不レ関レ典君子所レ慚」（序分義）という指摘に順い、臨終についての用語例を確かめたい。『教行信証』には引文・自釈を合せて十二文（他に同意の語二、三あり）、その他の撰述にも十二文を数えることができる。「死者捨二所受身一」（大般涅槃経）といわれるが、文例の臨終は三種の死（放逸・破戒・壊命根）のうち壊命根死にあたる。

宗祖のいわゆる大経往生の因果と、観経往生・阿弥陀経往生の因果とを区別するものは（三経往生文類・教行信証）、平生業成、現生正定聚と、臨終業成、臨終来迎との対比であり、真実の世界と、方便の世界との差異である。

平生と臨終の簡別は、穢身の命根の存亡にある。死を㈠命尽死㈡外縁死に分け、㈠に命尽非是福尽・福尽非是命尽・福命俱尽の三類、㈡に非分自害死・横為他死・俱死の三類を立てるが、ここに自然死と横死との区別が窺える（大般涅槃経）。ほかに寿尽財不尽死・財尽寿不尽死・財寿俱尽死・財寿俱不尽死の説（大毘婆沙論二〇）、寿尽死・福尽死・不避不平等死の説（瑜伽論一）もある。『本願薬師経』にも九種の横死を説くが、宗祖も引用しており、これについては後に述べたい。

宗祖が臨終の善悪を問わず「をはりもめでたく候へ」とのべ、明法房の往生について「めでたきこと」といい、平塚入道の往生にも「めでたさ」をのべているのは（末灯鈔）、いかなる臨終であろうか。およそ臨終には、三種の愛（自体・境界・当生）があり、妄念をとどめがたいが、仏力の加被により一心不乱ならしめるといわれる（西方指南抄上本・三部経大意）。ここに意識の表層でなくて、根本識、業識の深層が問われているが、『十善法語』には、臨終の人の面上に五色の風があり、黒色・青色・黄色を三悪道のしるし、常の色を人界、鮮花色を天界の証として、悪相と善相の因果を分ける。『諸経要集』には、作善の人の臨終は、足より冷えはじめ体温の残る位置によって、人・天の生処を予察し、作悪の人のそれは、頭頂より冷えはじめ体温の残る位置で三悪の生処を予想している。

このような死相の験法を、宗祖が全くとらないことは既にのべた。「善信が身には、臨終の善悪をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり」（末灯鈔）の故にである。

宗祖は、念仏三昧に魔事のないことを明すのに元照の疏を引き（観経義疏・小経義疏―行巻）、弥陀の十一力により臨終まで護持されること、臨終には識神主なく善悪の業種が発現して、顚倒の相をあらわにするところを、浄業と慈悲の内外の密益によって、心が顚倒しないで往生するという。ここには、従来の思想、すなわち来迎による臨終正念、道の先達、魔事の対治（漢語灯録七）に対して、全く新しい領解が示されている。宗祖によれば、信一念に正念に住し、臨終まで相続するとのべ（末灯鈔）、すでに二尊の遣喚に信順して白道を歩みつつあるから、臨終一念に大般涅槃を超証するといい（信巻）、現生に弥陀・諸仏・諸菩薩の護念をうけていて、臨終に魔事がないといわれる（行巻・信巻）。

したがって来迎についても、「観音勢至自来迎」の釈（五会法事讃―唯信鈔文意）には、「自ハミヅカラトイフナリ……マタ自

ハオノヅカラトイフ」と不請の摂護、願力の自然をあげ、「来ハ浄土ニキタラシムトイフ……マタ来ハカヘルトイフ」と釈して、「カヘル」にも願力により法性の都に還帰する意と、大慈悲をもって生死海へ還来する意との往還二相を見きわめ、「迎トイフハムカヘタマフトイフ、マツトイフココロナリ」とのべて、「コノユヘニ信心ヤブレズ、カタブカズ、ミダレヌコト金剛ノゴトクナルガユヘニ金剛ノ信心トハマフスナリ、コレヲ迎トイフナリ」という。

ここには、来迎の本質が信楽の一念における往還二廻向と、金剛心の成就として解明されている。「摂取不捨」の左訓「オサメトル、ヒトタビトリテナガクステヌナリ、セフハモノノニグルヲオワエトルナリ、セフハオサメトル、シユハムカヘトル」（浄土和讃）の意であり、また「金剛心ヲエタル人ハ、正定聚ニ住スルユヘニ、臨終ノトキニアラズ、カネテ尋常ノトキヨリツネニ摂護シテステタマハザレバ、摂得往生トマフス也」（尊号真像銘文）の意である。

したがって「めでたき」臨終とは、奇瑞を示すためでなく、「御信心たじろがせたまはずして」「信心たがはずして」（末灯鈔）の往生であるから、「めでたき」ことなのである。

『歎異抄』では、踊躍歓喜の心がおろそかであるのも、いそぎ浄土へまいりたい心のないのも煩悩の所為とし、「なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまひるべきなり」とのべ、また「いかなる不思議ありて、罪業をおかし、念仏せずしてをはるとも」往生すると教えている。蓮位の添状にみえる高田の覚信房の「南無阿弥陀仏、南無無碍光如来、南無不可思議光如来ととなえられて、てをくみてしづかにおわられ」た相状（末灯鈔）、宗祖と覚信房との問答（口伝鈔）などには、その具体的事実が窺える。これらの「めでたき」臨終の根拠につき、「如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとまふされける、すこしもたがはずさふらふなり」（末灯鈔）と示している。

さて、すでに注意した横死について考えたい。宗祖が『薬師経』の九種の横死を引証し（化巻）、特に第一と第八を出して、他を省略している。ここには個人的な健康管理は勿論のこと、思慮を欠くために招く社会的な災害をも防止する知的な判断を要請している。これを明確にするのは、「念仏する人の死にやう」に、身より病をする人と心より病をする人との区別をあげ（大般涅槃経→御消息集）、身病（因水・因風・因熱・雑病・各病）の死は、臨終の様相を問わずに往生できるが、心病（踊躍・恐怖・憂愁・愚癡）の死は、天魔ともなり、地獄へも堕ちるとのべ、「よくよく御はからひさふらふべし」と誡める。

思うに、心病の根基は邪見と憍慢に帰し、その弊は理由なき躁と鬱に終始するといえよう。ここには恐るべき臨終への警告がある。

阿闍世の病に対し、世尊が慰諭と月愛三昧をもって身病・心病を治療されたこころ（大般涅槃経―信巻）にも、その意が窺われる。心病の最たるものは、魂の死であり、「逆謗ノ屍骸」（高僧和讃）、「二乗雑善中下屍骸」（信巻）である。この屍骸に永遠の復活を与えるのが、甘露の法、長生不死の神方たる本願醍醐の妙薬に他ならない。

さて、このように臨終を期せず、来迎を待たない金剛心の行者にこそ、一日一日、一瞬一瞬を諦観して、真に生死を超えていく心構えが重視されるのである。この意味を最もよく示すものが、小論のはじめに注目した「恒願一切臨終時」の釈である。

「オリニシタガフテ、トキドキモネガヘトイフナリ」と恒願の意をあげ、「一切臨終時」を「極楽ヲネガフヨロヅノ衆生、イノチオハラムトキマデトイフコトバ」と領解した。

これは単なる臨終の時ではなく、今の一瞬一瞬を指している。「勝縁勝境」を「仏ヲモミタテマツリ、ヒカリヲモミ、異香ヲモカギ、善知識ノススメニモアハムトオモヘトナリ」と解釈し、「悉現前」については、「サマザマノメデタキコトドモ、メノマヘニアラハレタマヘトネガヘトナリ」とのべる。すなわち『観念法門』の五種増上縁の意をうけ、現生護念増上縁、滅罪増上縁が明されている。

「勝縁勝境」は、常願により現前するのではない。常と恒が区別され、恒願の釈で示すように、摂取の光益で既に常在している勝縁勝境なのである。それが即得往生の証であり、「真実信心内因、摂取不捨外縁」（愚禿鈔）の現証に他ならない。

かくして「臨終ノ一念ニイタルマデ、トドマラズ、キエズ、タエズ」（一念多念文意）といわれる貪瞋煩悩の身なればこそ、かかる身を「コトニアハレミタマフ」（歎異抄）願力を仰ぎつつ、「可〻恥可〻傷矣」（信巻）の慚愧をもって、悲喜交流の生涯を送り、ついに「臨終一念之夕、超二証大般涅槃一」（信巻）のである。

高等教育機関における「不安定就業層」の一形態

松村尚子

一、今日、ほとんどすべての大学・短期大学等において、相当数の非常勤教員が専任教員と並んで教育に当っていることは周知の事実である。政府の統計によれば、「兼務教員」として把捉される非常勤教員の総数は、昭和五十六年現在、大学・短大・高専合計でのべ九万六千人に上り、同年の専任教員総数十二万六千人の七六％に相当する。又、各学校の開講科目総数のうち非常勤教員担当の教科目数の割合（「非常勤教員依存率」という）をみても、全国平均で国立大学三〇％、私立大学四五％に達しなお増加傾向にある。今や我が国の高等教育は非常勤教員の存在を抜きにしては成り立ちえないといっても過言ではないであろう。

このように非常勤教員は現実には不可欠の一部分でありながら、個人のレベルはともかく、総体としてはそれがどのような人々の集団であるかの究明はなにもなされていない。わずかに学校基本調査報告等で兼務教員のなかの「教員から」の兼務者と「教員以外から」の兼務者とが区別され、その性別と数が記載されるのみである。専任教員でありつつ非常勤講師として他の大学等に出講する「教員から」兼務者についても論ずべき点はあるけれども、さしあたりいま問題とされるべきは、「教員以外から」の兼務者、つまり本務校のない非常勤教員であると考える。なぜなら、この層は様々な社会的・経済的・政策的な事情から増大し続け、とり